

土木紀行四国支部「土木紀行」 No. 56

北浜物揚場岸壁—宇高鉄道連絡船航路による高松港の発展—

香川県の東部に位置する高松市玉藻町・北浜町には、高松港という港湾がある。東に屋島、西に五色台、北に女木島と男木島、そして沖合約20kmには小豆島と、多くの島に囲まれている。昔は四国と本州を結ぶ海陸交通の要衝として重要な位置を占め、現在では港湾法上の重要港湾、港則法上の特定港に指定されている四国を代表する港湾である。

この港湾には、石積みの岸壁、北浜物揚場岸壁が存在する。岸壁とは、接岸している船から荷物を降ろしたり、乗客を降ろしたりするために作られた構造物のことである。北浜物揚場岸壁は、昭和3年竣工の石積み護岸を伴い、延長約300mが今も尚、現存している。この岸壁は花崗岩切石の布積みで、上端部の石材上面が粗く面取りされたようになっており、造られた当初の姿が比較的良好に現存し、近代港湾の構成要素をよく示している。

また、島国である日本の鉄道は、海底トンネル、長大な橋梁などによって繋がれる以前には、海に遮断され交流ができない運命にあった。鉄道連絡船は、鉄道と鉄道とを連絡する必要から必然的に発達してきたといえるだろう。

ここからは、高松港の発展を連絡船、宇高鉄道連絡船航路の観点から見てみよう。宇高鉄道連絡船航路は、宇野線岡山—宇野間の開通にともなって本州と四国を結ぶ航路として、宇野—高松間が開設された。そもそも、岡山・高松間の航路は、山陽鉄道が宇野線を敷設して、宇野・高松間の連絡航路の直営を計画していた。しかし、宇野線の建設には長い年月がかかるということで、山陽汽船会社を設立して、高松・岡山間に航路を開いた。これが今日の宇高鉄道連絡船航路の前身である。また、宇高鉄道連絡船航路は明治43年6月に開通した宇野線と同時期に開設した。宇高航路が開通した際に、従来からの岡山航路と多度津航路を廃止、新しく宇野・高松間の短区間航路が開かれた。宇高鉄道連絡船航路が外遊した際に、連絡船として玉藻丸、児島丸が配された。宇高鉄道連絡船航路は2船による1日4往復の運航とハシケによる1日1往復の貨物輸送を行っていた。

大正に移り、高松港は一般の好景気と地方行事などによって乗客は増える一方になった。大衆の生活は景気の上昇と共に派手になっていき、団体旅行客が増加していった。特に春季の行楽旅行シーズンには空前の混雑を呈するほどに至った。1船が休航してしまうと、宇高鉄道連絡船航路は輸送能力が半減してしまう始末であった。



写真1 西方向に見た現在の北浜物揚場

さて、宇高鉄道連絡船航路がいかに高松港の発展に貢献してきたかがわかってもらえたらう。宇高鉄道連絡船航路による発展がなければ、今日の高松港は存在しなかったかもしれない。また、宇高鉄道の連絡船航路は昭和に入っても高松港に貢献し、宇野線からの連絡船は、北浜物揚場岸壁に接岸してきた。北浜物揚場岸壁にとって、宇高鉄道の連絡船は共に高松港を支えあってきた仲間だったと思われる。北浜物揚場岸壁にとっても、宇高鉄道連絡船航路による高松港の発展はとても大きな意味を持っている。北浜物揚場岸壁は、宇高鉄道連絡航路による高松港の発展を物語る唯一の残存施設といえるのではないだろうか。

現在では、香川と岡山の2県を往来するのに船に乗って移動する人はそれほど多くはない。たまには、船で高松と岡山を往来してみたいはいかがだろうか。



写真2 現在の宇高国道フェリーポート



写真3 北浜物揚場周辺に停まっている船

参考文献

- (1) 四国鉄道75年史 日本国有鉄道四国支社 昭和40年発行
- (2) 海に開かれた都市～高松―港湾都市900年のあゆみ～ 香川県歴史博物館 平成19年発行
- (3) 香川県の近代化遺産 香川県教育委員会 2005年発行



写真4 東方向に見た石積みの物揚場

執筆

徳島大学工学部建設工学科4年

偉士大恵美